二〇二一年八月七日

配管の灼けて臨海工業地　素秀

山頂の涼風に佇ち歓談す　宏虎

橋の上から子らが飛ぶ夏の川　凡士

身体拭く熱きタオルや土用入　なつき

灯涼し眠ることなき駐機場　むべ

片陰を母にゆづりし帰り道　更紗

押入れに小蟹の骸海の宿　むべ

朝涼や厨に母とならび立ち　更紗

ラジオ体操を急かせる蝉しぐれ　せいじ

露店なき疫禍参道蝉時雨　なつき

伝説の小径と標竹落葉　よし子

毎週句会秀句・みのる選・二〇二一年八月八日